第４章 環境保全活動の定着・拡大を目指して

第１節　環境保全活動をめぐる現状と課題

１．少子高齢化の進行に伴う環境政策への影響

少子高齢化の進行に伴う人口構造の変化は、市税の減収、社会保障経費の増大など市の財政運営に影響を及ぼし、限られた経営資源の効率的な運用のためにも「選択と集中」による行政経営が求められています。

このような状況の中、環境分野においても、市の環境を今後どのように維持していくかが大きな課題であり、活動団体の高齢化や厳しい財政状況を踏まえると、これまで以上に市民・事業者・行政の協働による活動を強化する必要があります。

２．環境保全活動の担い手不足の深刻化

平成 26 年度に実施した市民・事業者アンケート調査結果によれば、「自然観察」や「緑化活動」などの環境保全活動への参加経験のある人は 10%以下にとどまっており、環境保全活動に対する市民意識は極めて低いのが実態です。

また、環境保全活動に参加している人は 50 代以上の方が多く、参加する人が固定化するなどの傾向があります。

このような現状を踏まえると、近い将来、環境保全活動の担い手がいなくなり、市の環境の維持が難しくなることが懸念されます。

３．環境保全活動の定着・拡大の必要性

複雑で多様化する環境問題を解決していくためには、市民・事業者・行政など全ての主体が環境との関わりを正しく理解し、これまでのライフスタイルや事業活動を見直すことが不可欠です。

そのためには、子どもから大人までが環境問題の現状や課題について自ら気づき、解決策を考え、社会のあらゆる場面（家庭・職場・地域等）において、環境に配慮した行動を取ることが求められています。

市民・事業者・行政の協働による環境保全活動の拡大と活性化を図るため、老若男女や市民・事業者を問わず、環境活動に今まで参加したことがない人が参加するには、何が障壁になっているのか（要因・問題）、どうすれば参加できるようになるのか（解決策）を探り、将来にわたって環境保全活動が継続していく仕組みをつくっていくことが重要です。

第２節　環境保全活動の定着・拡大を目指して

環境保全活動に参加したことがない人の理由は様々であり、一様な対応方針では新たな参加者の獲得は望めません。

そこで、環境保全活動の定着・拡大と活性化を図るため、「なぜ環境保全活動に新たに参加する人が少ないのか？」を討議テーマとする市民ワークショップを開催し、市民の環境保全活動への興味・参加の意思レベルに応じた解決策を整理しました。

１．環境保全活動の種類と内容

環境保全活動とひと言で言っても、イメージする活動は人それぞれです。そこで、環境保全活動の種類と内容について、以下のとおり整理しました。

【表 4-1】　環境保全活動の種類と内容

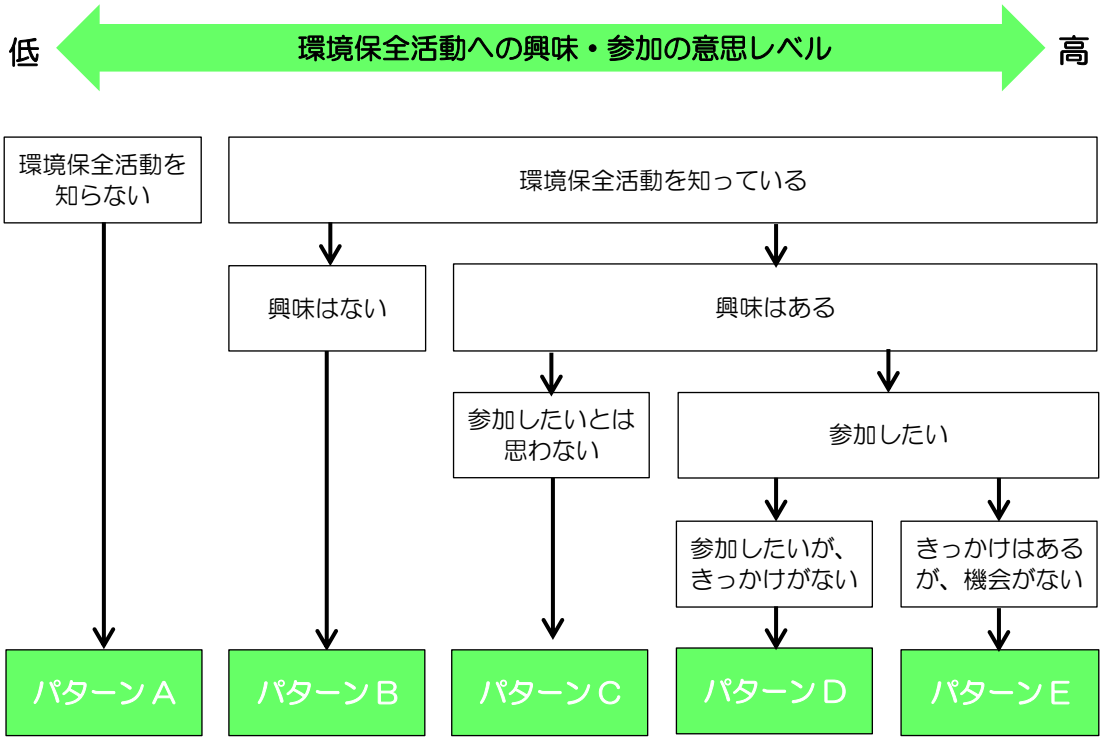
活動の種類	活動の内容
リサイクル	○ごみの分別をする ○資源ごみのリサイクルを行う ○不要なおもちゃや古着等を有効活用する
清掃 （環境美化）	○自宅・職場周辺のごみ拾いや掃き掃除を行う ○学校や PTA 等が集団でごみ拾いを行う ○地域住民が近隣公園等の除草を行う ○飼育しているペットの糞を適切に始末する
自然環境保全	○風呂の残り湯や雨水を洗濯や草花の水やりに利用する ○庭・ベランダの緑化や家庭菜園による栽培を行う ○外来種の駆除や希少種の保護などを行う
農地保全	○地元産農産物の購入により、地産地消に努める ○農業者が直売所等で農産物を販売する ○体験農園や学校ファームで農作物を栽培・収穫する
環境教育	○地域のリサイクル活動や清掃活動に家族や会社ぐるみで参加する ○節電・節水・食べ残しゼロ等を家庭の中で心がける ○学校にグリーンカーテンやビオトープ等を設置する
その他	○環境にやさしい省エネルギー設備の導入や電気自動車を購入する ○徒歩や自転車、公共交通機関の利用を心がける

2. 環境保全活動の定着・拡大に向けた対応パターンの整理

環境保全活動に今まで参加したことがない人を、環境保全活動への興味・参加の意思レベルに応じて５つのパターンに分類しました。

新たに環境保全活動に参加する人を増やしていくため、各パターンの要因・問題の特質を踏まえた解決策を講じていきます。

【図 4-1】環境保全活動の定着・拡大に向けた対応パターン



3. 環境保全活動の定着・拡大に向けて

前項で分類したパターンごとに環境保全活動に参加しない要因・問題を洗い出し、参加を促すための課題を抽出しました。そして、その課題を解決するための方策として、解決策・定着化策を挙げました。

（1）各類型パターンの環境保全活動の解決策・定着化策

■パターンＡ：環境保全活動を知らない人への対応

要因・問題 ＊参加したことがない人の意識・考え	○環境問題を身近な問題だと感じていない。 ○日常生活と環境問題が密着していない。 ○広報誌を見ただけでは活動内容がわからない。 ○宣伝・PR が不足している。 ○市民目線による市民向けの情報発信ができていない。 ○参加者による参加者向けの情報発信ができていない。

↓

課題	○環境活動について認知度を向上させる。

↓

解決の方向性	○市民目線による市民向けの情報発信を強化する。 ○広報や HP 等では活動内容を詳しく伝えたり、掲載方法の工夫をする。 ○「環境」「作業」「活動」など、硬いイメージの言葉を入れずに PR する。

↓

解決策・定着化策 ＊主催者の対応例	○市民参加型ネット掲示板で市民が情報発信する。 ○活動風景などのインターネット動画を作成し、発信する。 ○高校生や大学生に環境イベントの企画や広報に参加してもらう。 （例）CM 制作、地域情報誌制作 ○SNS に投稿するたびにポイントが付与されるなど、発信を促進するための仕組みづくりをする。 ○「環境」と他分野をコラボレーションさせて情報発信をする。

■パターンＢ：環境保全活動を知ってはいるが、興味がない人への対応

要因・問題 ＊参加したことがない人の意識・考え	○環境活動 ＝ 奉仕活動という印象があり、自分ひとりがやらなくても、ほかの誰かがやってくれると思っている。 ○環境活動 ＝ 清掃活動・リサイクル活動という印象があり、重労働だと思ってしまう。 ○「環境」というキーワードが重く、専門的な活動のイメージがある。 ○活動が楽しそうに思えない。 ○自分ができることはすでに実施していると思っている。 ○環境保全活動は必要ないと思っている。

↓

課題	○環境活動に興味・関心を持ってもらう。

↓

解決の方向性	○活動のイメージを楽しいものに変える。 ○「環境問題」の深刻さを伝える。

↓

解決策・定着化策 ＊主催者の対応例	○「環境」「ECO」という言葉からイメージされるものとは全くかけ離れたファッションの部分（外見）から PR していく。 （例）山ガール・森ガールのように「エコガール」として PR ○「環境活動」を前面に出さないでイベント（食べ物・ポイント・交流会など）を行う。 ○みどりの祭典、活動団体の PR 展示、飲食等のブース出店などの工夫をする。 ○「環境」に関連したイメージキャラクターを自作する。 ○出前講座などを利用し、地域で学習会を開催する。

■パターンＣ：環境保全活動に興味はあるが、参加したいとは思わない人への対応

要因・問題 ＊参加したことがない人の意識・考え	○環境活動を難しく捉えており、参加することに及び腰になる。 ○参加すると責任ある仕事を任されるのではないかと不安になる。 ○自分が疲れることだから気が乗らない。 ○日常生活において経済的・時間的・精神的に余裕がない。 ○活動の成果が見えない。また、成果があっても周知されていない。 ○一度参加すると今後も活動から抜けられないイメージがある。 ○知らない人と付き合うのが煩わしい。

↓

課題	○参加したいという欲求をかき立て、メリットや価値に共感してもらう。

↓

解決の方向性	○イベントのような楽しさを演出する。 ○誰もが気軽に参加できるよう、活動の負担を軽くする。 ○活動の「楽しさ」と「大切さ」を伝える。

↓

解決策・定着化策 ＊主催者の対応例	○楽しくなるようなイベントを企画する。 ○意外性のあるものとのコラボレーション企画を実施する。 （例）ECO コン（ECO +合コン）、婚活エコツアー ○親子で一緒に楽しめる工夫をする。 ○まずは活動を見てもらう機会を作る。 （例）活動見学会の実施、お試し参加の受け入れ ○活動団体の活動目的・内容や成果を行政でも PR する。 ○自然観察や昆虫採集（カブトムシとり）など、楽しいアクティビティを前面に出して PR する。 ○参加する人の気持ちに配慮した対応を行う。

■パターンＤ：環境保全活動に参加したいが、きっかけがない人への対応

要因・問題 ＊参加したことがない人の意識・考え	○どのようにすれば参加できるのかがわからない。 ○知り合いがいないから参加しづらい。 ○一人で行くのが嫌である。 ○参加しても何をしてよいかわからない。 ○アクティブに活動している人とそうでない人との間に壁を感じて、今一歩踏み込めない。 ○年配の方が多いと若い世代が世代間のギャップを感じ、入り込めない。 ○身の回りに参加している人がいない。

↓

課題	○参加する動機を提供するとともに、メリットや価値を頻繁に連想させる。

↓

解決の方向性	○気心の知れた友人・知人など、誰かと誘い合って活動に参加するよう促す。 ○活動の成果を自分で体感してもらう。 ○人々が関心の高いことに関連づけて、参加を呼びかける。

↓

解決策・定着化策 ＊主催者の対応例	○参加を呼びかける際には、歓迎ムードを演出する。 ○広報誌で「初参加者のみ」など各回で対象者を絞って募集をする。 ○自治会や子ども会で環境活動をするという慣習をつくり、子どもの頃から環境意識を醸成する。 ○体験型活動により、「活動」だけでなく「副産物」を実感させる。 （例）とれた作物でバーベキューや鍋をふるまう。 ○季節感を楽しむようなお花見（レンゲソウ、サクラなど）・お月見等を活動に盛り込む。

■パターンＥ：環境保全活動に参加するきっかけはあるが、
機会がない人への対応

要因・問題 ＊参加したことがない人の意識・考え	○仕事や育児に忙しく、活動に参加する時間が持てない。 ○活動場所が近所でないと、継続して参加することが難しい。 ○自分のライフスタイルと開催日時・開催場所等が合わない。

↓

課題	○イベントや活動機会を提供し、参加してもらう。

↓

解決の方向性	○みんなで一斉に取り組めて共有できるイベントを考える。 ○自分のできる範囲で活動してもらう。 ○活動時間・活動量・活動場所など、多種多様な選択肢を増やす。

↓

解決策・定着化策 ＊主催者の対応例	○子連れでも参加できるように工夫する。 ○身近にある公園や川、耕作放棄地などの自然を活用する。 ○身近で気軽にイベントが開催できる場所を確保する。 ○公園の手入れを主な利用者である子供たち自身にしてもらう。

（２）環境保全活動の定着・拡大に向けた今後の取組（取組の方向性）

未来の子どもたちに、安全で快適な都市環境と恵み豊かな自然環境が融合した上尾の特徴ある住環境を引き継いでいくためには、市民・事業者・行政の相互理解と環境保全活動に取り組む意欲の増進、そのための幅広い世代への環境教育、さらに環境保全活動を効果的に進める上での協働の取組が重要です。

それらを推進するためには、従来の環境保全活動の枠組みや概念に捉われない新たな視点や価値観で、活動を展開していく必要があります。

そのためにも、行政として、今回の市民ワークショップで挙げられた意見を参考に、市民・事業者・行政による環境保全活動の協働モデルを構築し、三者協働で環境保全活動を定着させ、地域全体にその輪を拡大させていきます。